二〇二〇年三月二一日（参加者一四名）

蜷の道吾の人生にさも似たり　うつぎ
水松の気根によきによき春の泥　うつぎ
大手門額縁にして城の春　たか子
峡の道右手に左手に芽吹きをり　こすもす
天守背に風の意のまま雪柳　ぽんこ
小雀のまろび遊べる庭うらら　素秀
老農夫夕日に春耕余念なし　はく子
つんつんと切つ先立てし菖蒲の芽　うつぎ
見はるかす淀の岬鼻風光る　菜々
豆の花貸農園の風に舞ふ　はく子
起伏野に点在したる野梅かな　せいじ
水温む青天井の展けけり　満天
又一人春のベンチに入れ替はり　小袖
なぞり読む蕪村の句碑の暖かし　菜々
車椅子母と見上ぐる初桜　わかば
囀れる森のベンチにミニ句会　ぽんこ
春日燦苑の真中にマリア像　満天
土筆野といひたきほどの河原かな　わかば
百々御所の皇女の愛でし古雛　よう子
萬屋の帳簿机に明治雛　なつき
蕪村碑へ淀の長堤青き踏む　菜々

吟行句会みのる選

二〇二〇年三月二一日（参加者一四名）